

第 **2** 章

音更町の概要

- 2-1 自然環境条件
- 2-2 社会経済条件
- 2-3 歴史文化的背景
- 2-4 音更町の地域特性



第2章 音更町の概要

■ 2-1 自然環境条件

2-1-1 位置と地勢

音更町は、北海道東部、十勝平野のほぼ中央に位置し、南は十勝川を境に帯広市、東は池田町、南東に幕別町、北は士幌町、西は芽室町、北西に鹿追町の1市5町と接しています。

町域は東西23.2km、南北22.9kmにわたり、面積は466.09km²の不整形なひし形をしています。

標高は、最も高い地点が町の北西端で標高305m、最も低い地点が南東端で標高20mです。地形は、町の東端を南北に走るオサルシナイ丘陵地帯を除いて概ね平坦です。

町内には東から士幌川、音更川、然別川がほぼ北から南へ貫流し、それぞれ南端で道内2番目の流域面積を持つ一級河川である十勝川に注いでいます。

町を南北に走る国道241号線は、北海道横断自動車道、国道38号線にアクセスし、道内主要都市と結ばれています。とちり帯広空港へは約30km、車で約40分の位置にあります。

鉄道はJR帯広駅が最寄り駅であり、札幌までは石勝線を利用して約220km、約2時間30分、釧路までは約130km、約1時間30分の位置にあります。

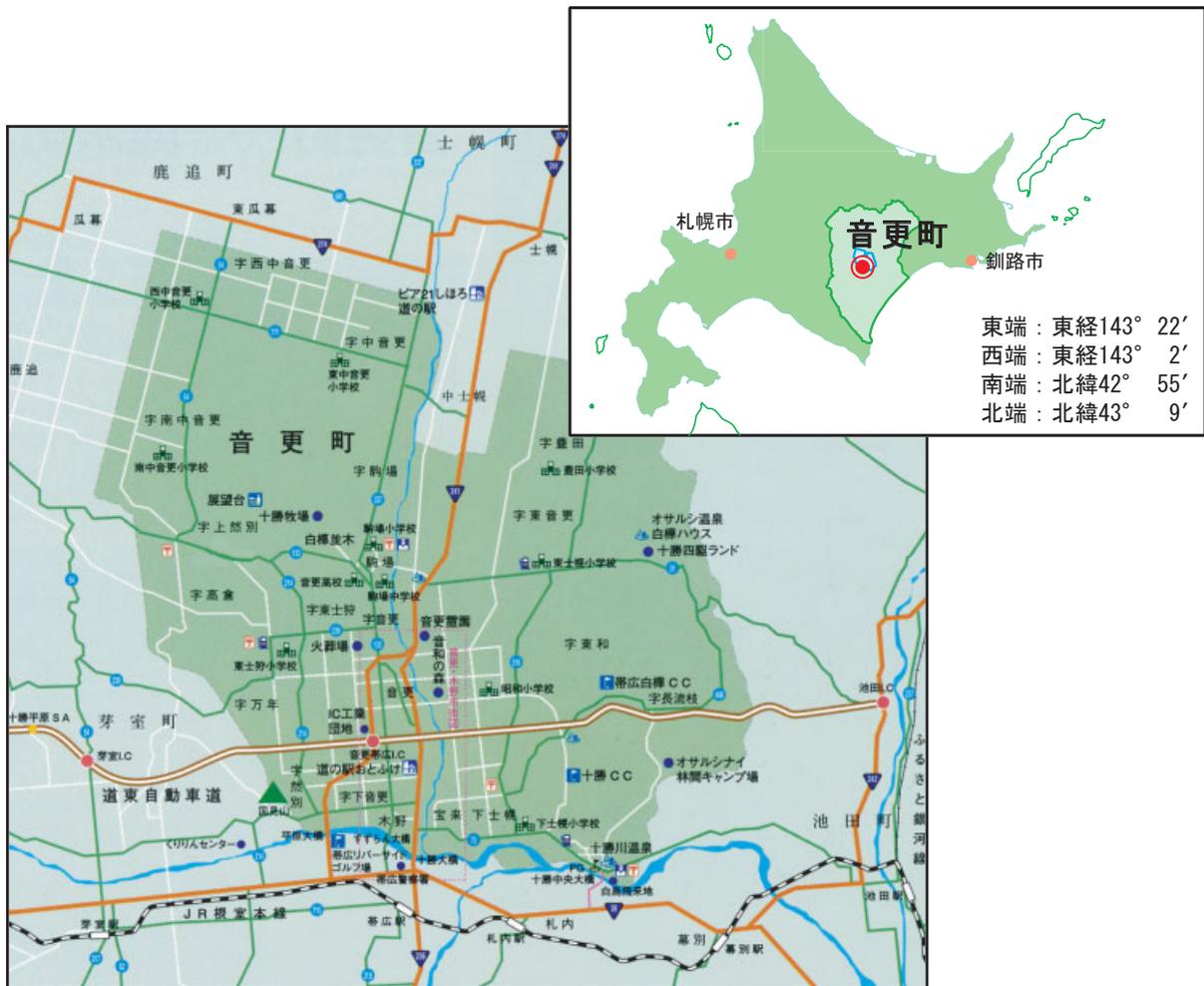


図 2-1-1 音更町の位置



2-1-2 土地利用

本町の土地利用をみると、2003年現在で、本町行政面積46,609ha中、耕地面積が23,465haと全体の50.3%を占め最も多く、次いで山林の11,064haで23.7%などとなっています。

1980年からの変遷を見ると、宅地としての土地利用が当時と比較して約50%増加しています。

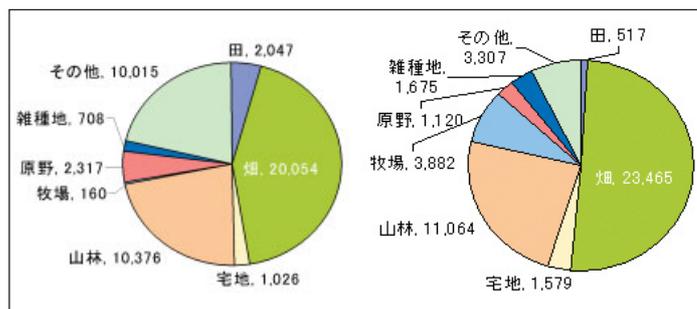


図 2-1-2 地目別土地利用の変遷〔左1980年、右2003年〕
(出典：音更町資料)

2-1-3 気象

(1) 気温・降水量

気候は、夏期には気温30℃を超える真夏日がある一方で冬期にはマイナス20℃を下回り、寒暖の差が大きく四季の変化に富んだ大陸性気候です。冬期間、日高山脈など山地からの下降気流により放射冷却現象が起こり、1月～2月を中心に気温が下がります。また、昼夜の寒暖差が大きいことも特徴のひとつとなっています。

年間平均気温は5.7℃であり、月別平均最高気温は23.9℃、月別平均最低気温はマイナス15.2℃です。

年間降水量は855mm/年で、雨量は8月～9月が比較的多くなっています。道内では比較的雨量の少ない地域で、特に2月の降水量は、18mm/月と極端に少なくなります。

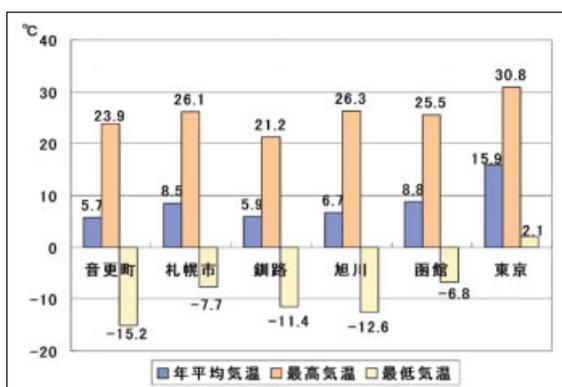


図 2-1-3 音更町と各都市の気温〔1971-2004年〕
(出典：気象庁)

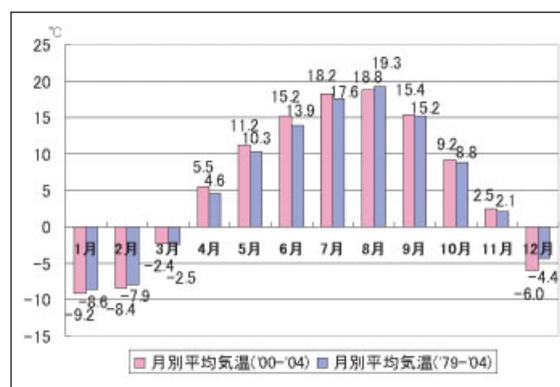


図 2-1-4 音更町の月別平均気温の比較〔過去25年・5年〕
(出典：気象庁)

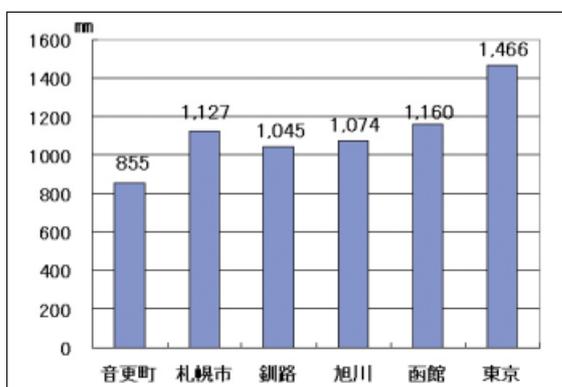


図 2-1-5 音更町と各都市の年間降水量〔1971-2004年〕
(出典：気象庁)

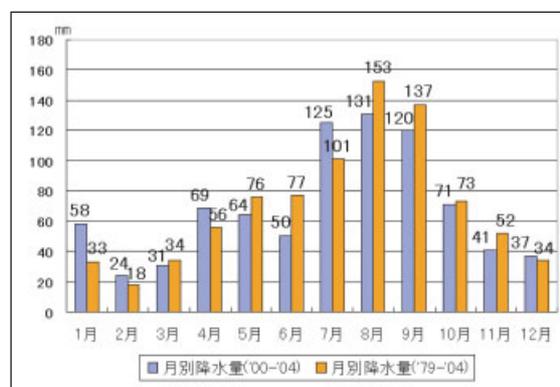


図 2-1-6 音更町の月別降水量の比較〔過去25年・5年〕
(出典：気象庁)



(2) 降雪量

本町の初雪は11月下旬ごろ、積雪の終わりは4月上旬から中旬にかけてとなります。年間降雪量の合計は約199cm（観測地点；帯広）で、道内では比較的少ない地域といえます。一方で、太平洋の湿った空気による低気圧の影響を受け、大雪となることがあります。

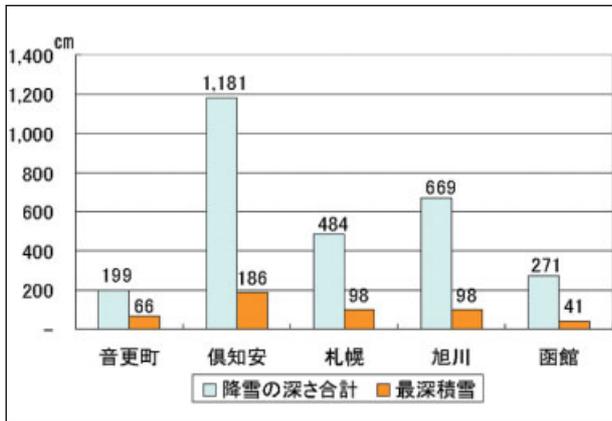


図 2-1-7 音更町と各都市の降雪深さの合計と最深積雪 [1971-2004年] (出典：気象庁)

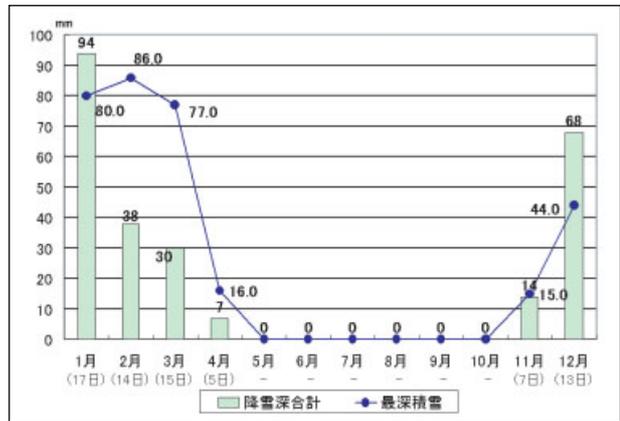


図 2-1-8 音更町の月別降雪量と降雪日数 [1979-2004年] (出典：気象庁)

(3) 風況

本町の風況は、概して播種期である3月から5月にかけて強風が吹くのが特徴です。これは、北西側にある山地の残雪や冷気と日差しの強まりで十勝平野は対流不安定となり西風が強くなるため、かつて地元ではその風を「馬糞風」と呼んでいました。また、夏は南東風が多いものの、風の強さは7月～9月が最も弱くなります。

強風は畑地の表土を風塵として舞い上げることがあるため、その防止策として本町を含む十勝地域には「耕地防風林」が多くあります。この耕地防風林のある農村風景は、十勝の代表的な景観資源として再評価されており、本町では防風林の育成を奨励しています。

過去10年間（1995年～2004年）の地上における本町の平均風速は2.1m/sです。また、月別平均風速、最大風速及び風向について道内主要都市および風力発電導入先進地域と比較すると下図（図2-1-9）のとおりで、内陸に位置する本町は沿岸部の都市と比較して、年間を通じて風速はさほど強くなく、留萌市の約4割となっています。

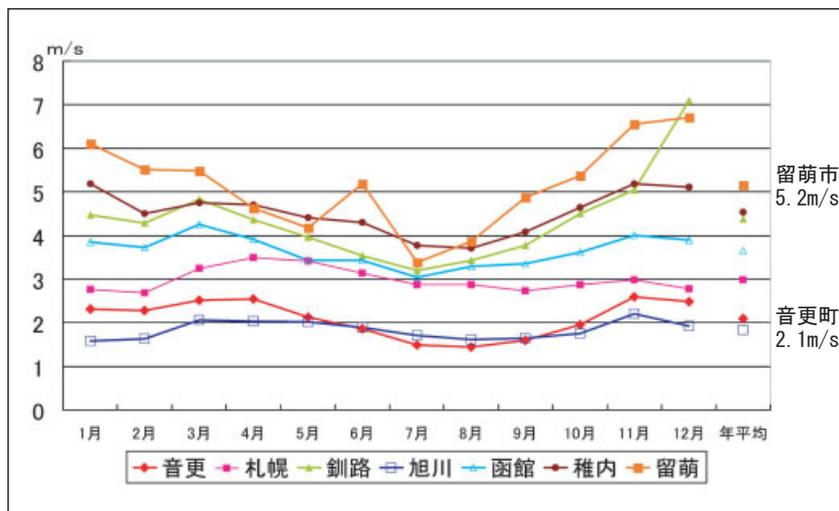


図 2-1-9 音更町と各都市の月別平均風速 [1995-2004年] (出典：気象庁)



表 2-1-1 音更町と各都市の平均風速・最大風速・風向
〔月別、2004年〕（出典：気象庁）

		単位:m/s												
区分	月別	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全年
音更町	平均	2.1	2.2	2.5	3.0	2.1	2.0	1.6	1.6	1.6	1.9	2.6	2.7	2.2
	最大	10.0	12.0	11.0	13.0	10.0	8.0	8.0	9.0	8.0	10.0	10.0	10.0	13.0
	風向	西北西	北北東	北西	北西	北西	北西	西北西	南南東	西南西	北北東	西北西	北西	北西
札幌	平均	3.3	3.7	3.8	4.3	4.5	3.2	3.3	3.3	3.4	3.2	3.6	3.3	3.6
	最大	16.3	15.8	14.2	15.6	19.2	14.9	12.8	13.3	21.7	12.0	15.3	16.9	19.2
	風向	北西	北北西	南南東	南南東	南	南	南南東	南南東	南南西	北西	南	北北西	—
釧路	平均	5.5	6.1	6.0	5.3	4.5	3.5	3.6	4.3	4.7	4.9	6.2	6.5	5.1
	最大	17.8	20.7	19.4	18.4	17.4	15.5	11.5	23.4	28.3	20.6	24.7	20.2	28.3
	風向	北西	北	南南西	西	南西	南西	北北東	南	南南西	西	西	西	—
旭川	平均	1.4	2.0	2.2	2.2	2.0	1.9	1.8	1.7	2.4	2.9	4.2	3.8	2.4
	最大	5.4	8.9	10.0	7.3	8.9	5.6	5.6	8.0	12.5	16.0	18.0	14.0	18.0
	風向	北西	南南西	南南東	西南西	南南東	西北西	西北西	西	南南西	西	西	南南東	—
函館	平均	3.7	4.4	4.3	4.0	3.1	2.8	2.8	3.1	3.4	3.1	4.1	4.0	3.6
	最大	13.6	18.3	14.7	15.6	11.0	12.8	10.9	18.0	19.5	13.1	18.2	16.2	19.5
	風向	西北西	北西	西	西北西	西	東南東	北西	東北東	南南西	西北西	西南西	東	—
留萌	平均	5.6	5.6	6.8	4.8	4.9	3.6	3.3	3.8	4.9	5.6	6.6	6.6	5.2
	最大	13.4	16.5	16.1	15.6	12.8	15.1	9.9	16.7	25.4	17.7	18.0	18.0	25.4
	風向	北	西北西	西南西	西北西	西南西	西南西	西南西	西	西南西	西南西	西	西	—
稚内	平均	5.2	5.6	5.0	4.8	4.6	5.0	4.1	3.8	4.3	4.4	5.4	5.4	4.9
	最大	18.1	18.7	13.7	13.9	12.9	14.5	12.2	11.3	16.1	13.6	13.7	13.7	18.7
	風向	北東	北東	西	北北西	東	南西	南西	西	南南東	北西	西南西	西南西	—

(4) 日照時間

本町の過去35年間の平均日照時間は2,016時間（1971年～2004年、観測地点；帯広）となっており、道内でも多日照地域となります。月別の日照時間は、3月が219時間で最も長く、7月が122時間で最も短くなっています。



図 2-1-10 音更町と各都市の年間日照時間
〔1971(音更1986)~2004年〕（出典：気象庁）

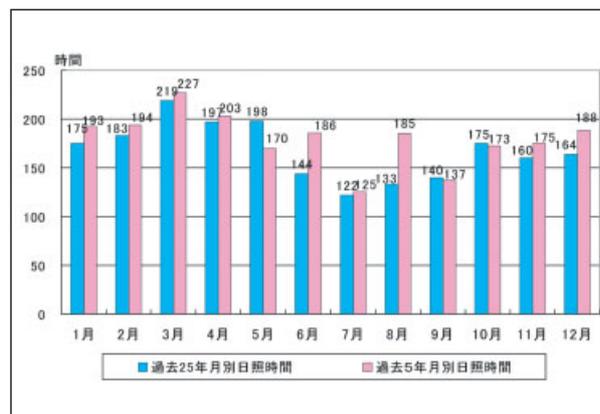


図 2-1-11 音更町の月別日照時間〔1986~2004年〕
（出典：気象庁）



2-1-4 河川

十勝川は、河川延長156km、支川204河川、全流域面積9,010km²（全国第6位）を有する一級河川であり、本町を流れる士幌川（流路延長39.6km、流域面積298km²）、音更川（流路延長94.0km、流域面積740km²）、然別川（流路延長66.7km、流域面積648km²）は、町の南端でそれぞれ十勝川に合流します。

3河川の月別流量は以下のとおりであり、年間を通じた流量の平均は、士幌川が3.57m³/sec、音更川が7.53m³/sec、然別川が3.82m³/secとなっています。

また、十勝川の水温について月別でみると、最も低い月は1月と2月で0.4℃、最も高い月は7月で16.4℃などとなっています。

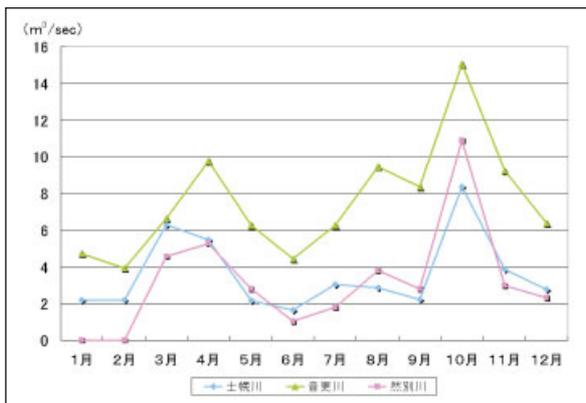


図 2-1-12 士幌川、音更川、然別川の流量
〔観測地点：音更町内、2002年〕
（出典：国土交通省）

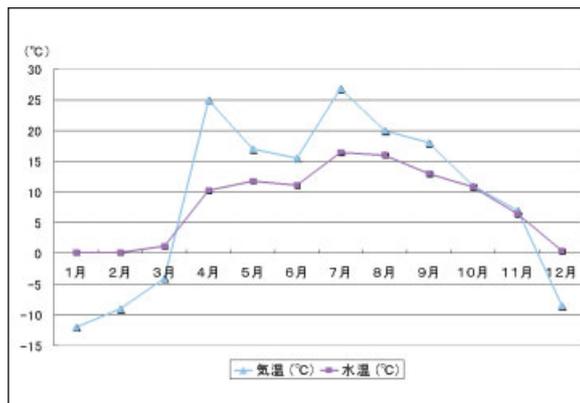


図 2-1-13 十勝川の月別水温
〔観測地点：十勝大橋、2002年〕
（出典：国土交通省）



■ 2-2 社会経済条件

本町は、日本有数の穀倉地帯を形成する十勝平野の中でも最大の耕地面積を有しており、農業王国十勝を支える屈指の大規模農業地帯となっています。

また、町内には2004年11月に北海道遺産に登録された植物性の「モール温泉」が湧出する十勝川温泉があり、十勝観光の拠点となっています。モール温泉は本町の観光産業を支える貴重な資源であり、希少な泉質を後世に残すため、その保護に努めています。

2-2-1 人口と世帯数

本町は隣接する帯広市を中心に、幕別町、芽室町の1市3町で帯広圏都市計画区域を構成しており、一体の生活圏の中で着実に人口増加が進んでいます。また、現在まで宅地造成事業を進めてきた結果、2004年12月末の人口は42,757人（世帯数16,904世帯）と、北海道内の町では最大となっています。

高齢化の状況について、2005年における高齢化率は19.8%と全道の20.9%、全国の19.9%をやや下回っています。しかし、町内農村部では農家戸数の減少、担い手不足、高齢化などが進み、高齢化率は25.9%と高い傾向にあり、今後、本町の高齢化率は増加傾向が続くと考えられています。

「第4期音更町総合計画（2001年-2010年）」では、都市基盤整備の推進、既存企業の活性化と新たな企業誘致、効率的な土地利用の促進により目標計画年次（2010年）の人口を45,000人と設定しています。

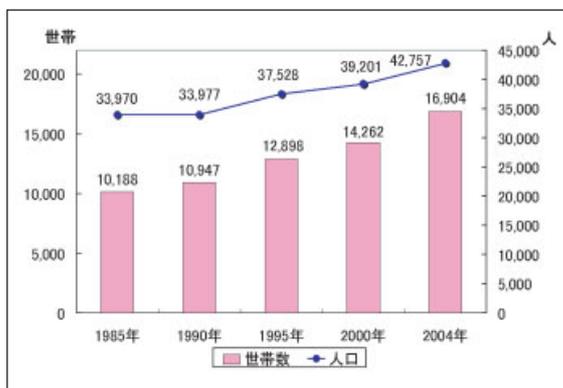


図 2-2-1 人口及び世帯数
(出典：国勢調査、音更町資料)

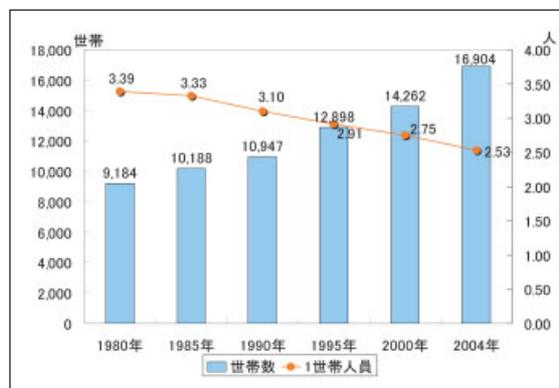


図 2-2-2 世帯数と世帯当たり人員の推移
(出典：国勢調査、音更町資料)

表 2-2-1 高齢化の状況

	音更町			北海道	全国
	人口	65歳以上	高齢化率	高齢化率	高齢化率
1980年	31,134	2,653	8.5%	8.1%	9.1%
1985年	33,970	3,523	10.4%	9.7%	10.3%
1990年	33,977	4,451	13.1%	12.0%	12.0%
1995年	37,528	5,726	15.3%	14.8%	14.5%
2000年	39,201	7,076	18.1%	18.2%	17.3%
2005年	43,075	8,539	19.8%	20.9%	19.9%

※ 1980～2000年までは国勢調査による。2005年は、音更町が住民基本台帳（11月）、北海道分は北海道企画振興部調べ（3月）、全国分は総務省統計局確報（7月）



2-2-2 産業構造と経済

2000年現在、本町の就業者数は19,859人となっています。産業別就業者数は、卸売・小売・飲食業などサービス業を中心とする第3次産業で12,420人（62.5%）、製造業を中心とする第2次産業は4,432人（22.3%）、基幹産業である農業を中心とする第1次産業は3,007人（15.1%）となっています。本町に住居を有する全従業者のうち他の市町村で従業するケースを見ると、帯広市内の6,808人を中心に、8,640人（就業者の43.5% 国勢調査〔2000〕）の町民が町外で働いています。

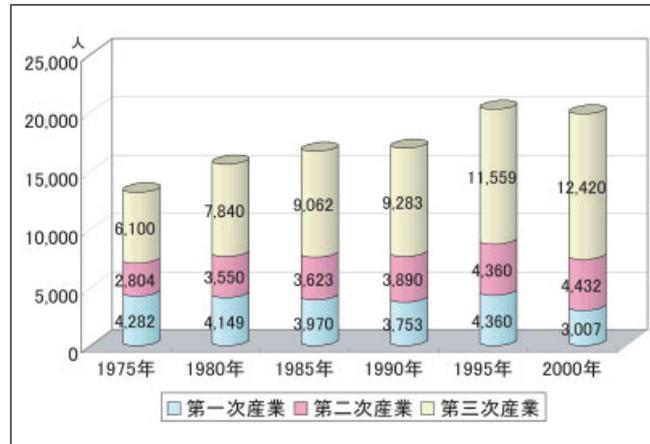


図 2-2-3 産業別就業者数の推移
(出典：音更町資料)

(1) 農業

本町の基幹産業である農業は、畑作4品（小麦、豆類、馬鈴しょ、てん菜）を中心に大規模経営化が進んでいます。1戸当たりの平均経営耕地面積は29.0ha^{*1}であり、全国平均の約18倍、北海道平均の約1.7倍となっています。

中でも、小麦、大豆、小豆は作付面積、生産量共に例年全国1位であり、我が国の食糧供給基地としての役割を果たしています。

畜産は、乳用牛9,090頭、肉用牛5,870頭、採卵鶏222千羽（2003.2現在〔北海道農林水産統計年報〕）などが飼養されており、1戸当たりの飼養頭数は、乳用牛で91頭/戸、肉用牛73頭/戸など、耕地部門と同様、大規模化の傾向にあります。

また近年では、ブロッコリー、長いも、人参などをはじめとする野菜の作付けも増えており、本町第5の作物として移出拡大、付加価値の向上を図っています。

しかし、農家戸数は年々減少しており、耕地の集約化の一因ともなっています。

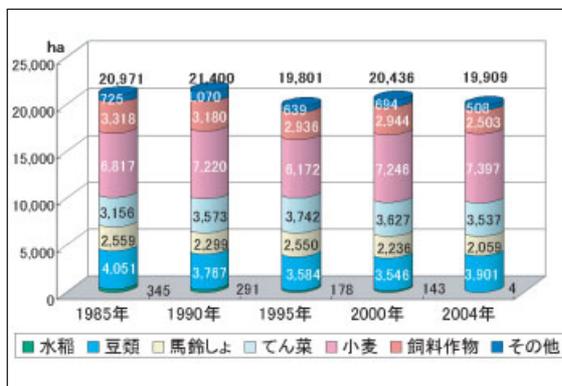


図 2-2-4 主要農産物作付面積の推移
(出典：音更町資料)

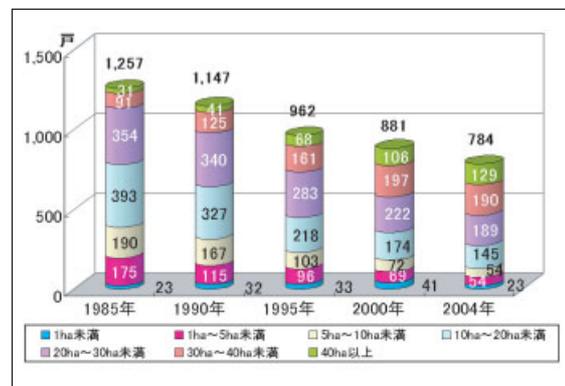


図 2-2-5 経営規模別農家数の推移
(出典：音更町資料)

*1 地目別面積（北海道行政協会市町村税概要）及び、農家戸数（音更町農業概要）より算出



(2) 林業

本町の林分構成は、林業生産活動が積極的な人工林帯や天然性樹林帯、広葉樹・針葉樹の混交林帯など、多様性に富んでいます。

森林面積は2005年12月現在、11,892haで、町全体面積の25.5%を占めています。所有別の内訳は、国有林が51ha、一般民有林として町有林が1,733ha、私有林が10,108haで、私有林が全森林面積の85.0%を占めるのが大きな特徴です。また種別内訳は天然林6,651ha、人工林4,991haなどとなっています。人工林はカラマツが主体で、人工林率42.0%と北海道の平均(27.3%)を上回っています。さらに森林の蓄積は、針葉樹1,105千 m^3 、広葉樹614千 m^3 です*1。

町内の豊田、東和、長流枝、下士幌地区東部には、人工林、天然林が集団的に存在しており、将来的にも良質で多様な木材の持続的供給が可能な地区となっています。

また、長流枝地区の南部には針葉樹や広葉樹が混交した地域があります。同地区は、鳥獣保護区に指定されており、動植物や自然景観に配慮した森林整備を推進する地区となっています。森林所有者は、10ha未満の小規模所有が多くなっています。



図 2-2-6 音更町の森林分布状況
(出典：音更町森林整備計画)



図 2-2-7 森林経営面積の割合
(出典：北海道林業統計)

表 2-2-2 樹種別森林蓄積量 (人工林 単位：千 m^3)
(出典：北海道林業統計)

		樹種別森林蓄積量 (人工林 単位：千 m^3)		計
		針葉樹	広葉樹	
音更町	国有林	1	5	6
	道有林	-	-	-
	市町村有林	252	57	309
	其他民有林	852	552	1,404
	計	1,105	614	1,719
全道	国有林	169,915	189,301	359,216
	道有林	31,590	42,249	73,839
	市町村有林	27,900	16,325	44,225
	其他民有林	112,839	196,513	309,352
	計	342,244	444,388	786,632

*1 北海道林業統計 (2005.12)



(3) 商業

本町の商業は、従業員数、年間販売額ともに伸びており堅調に推移しています。しかし、交通ネットワーク整備や消費者購買指向の多様化などにより、小規模小売店は減少の傾向にあります。

本町の商業地は大きく2つに分かれており、それをつなぐように主要幹線である国道241号線沿いのロードサイド型大型店舗が立地するといった状況にあります。音更地区では商業機能の集積を図るため、商店街の近代化事業や市街地再開発事業など商業地区の整備を進めています。

また、音更町都市計画マスタープランでは、主要幹線沿道などを「沿道サービス地区」と位置づけ、機能的な土地利用を促進しており、両市街地の連続性の確保など将来の市街地形態のあり方について基本方針を掲げています。



図 2-2-8 商店数・従業員数・年間商品販売額の推移
(出典：音更町資料)

(4) 工業

本町の工業は、畜産や農産物の加工などを主とした地域資源を活用した企業が立地していますが、活力ある発展のため、一層の企業誘致が課題となっています。

2000年から造成を開始したI C（インターチェンジ）工業団地は、北海道横断自動車道音更帯広I C、帯広北バイパスに直結する立地優位性を有する物流系工業団地です。地場の農産品のほとんどが素材のまま移出している現状と住工混在の土地利用の改善を図る目的で、下記の方針を掲げ企業の誘致を図っています。



図 2-2-9 製造事業所・従業員数・製造品出荷額の推移
(出典：音更町資料)

基本方針

- ① 農産物の付加価値を高める工場等の立地促進
- ② 町の工業振興を図る
- ③ 地場産業の集積と育成
- ④ 雇用の場の確保

図 2-2-10 I C工業団地基本方針



(5) 観光

十勝川温泉は十勝を代表する観光地であり、植物性のモール温泉として全国的にも有名です。低迷する経済情勢を反映し、1996年度の140万人をピークに観光入込み客数は一旦減少しましたが、近年では、かつて生息していたホテルの再生プロジェクトや地域主導による沿道の景観整備など、住民一丸の取組みが好評で、入り込み客数は増加傾向にあります。

旅行の個人化、多様化する需要や単価低下など、観光産業が抱える課題への対応が求められる中、本町の観光産業はアウトドアスポーツなど参加体験型観光の提供などにより、修学旅行生や外国人団体客を誘致し、体験・滞在型観光のニーズに応えています。今後は、細分化する市場実態を的確に捉え、滞在型観光のさらなる推進など、より一層の需要拡大方策が必要となっています。

また、観光産業は、農業や食品加工業など他産業との関連性も強く、観光産業の振興はまちづくり・地域振興の観点からみて重要です。

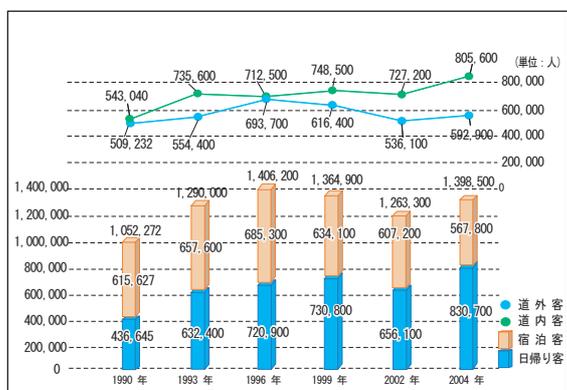


図 2-2-11 観光入込み客数の推移
(出典：音更町資料)

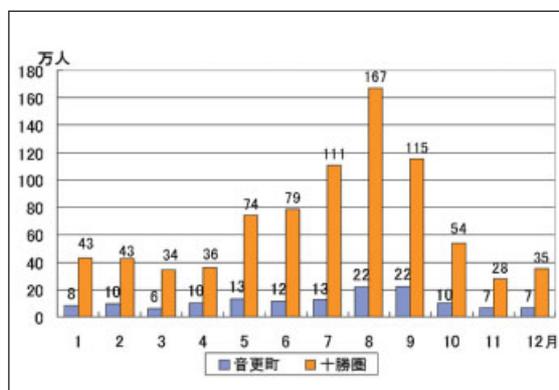


図 2-2-12 観光入込み客の状況 (月別)
(出典：北海道観光入込客数調査報告書H16)

2-2-3 交通基盤

本町の道路総延長は1,202kmであり、その内訳は下図のとおりとなっています(表 2-2-3)。国道241号線、道道帯広新得線、道道帯広浦幌線を骨格とし、さらに、北海道横断自動車道「音更帯広IC」が整備されており良好な交通条件を有しています。

一方、2000年度から町内で運行開始した「音更町コミュニティバス」は生活道路などを中心に1日6便が運行しています(4路線、2台)。2004年度の年間利用者数は31,439人で、町民の身近な足として安定的に利用されています。

表 2-2-3 道路延長の推移
(出典：音更町資料)

年次	各年4月1日現在 単位:km					橋りょう
	総延長	一般国道	道道	町道	高速	
1999年	1,195.1	28.1	144.1	1,001.9	21	338
2000年	1,195.2	28.1	144.1	1,002.0	21	338
2001年	1,188.5	28.1	144.1	995.3	21	341
2002年	1,193.1	28.1	145	999.0	21	342
2003年	1,200.7	28.1	145	1,006.6	21	344

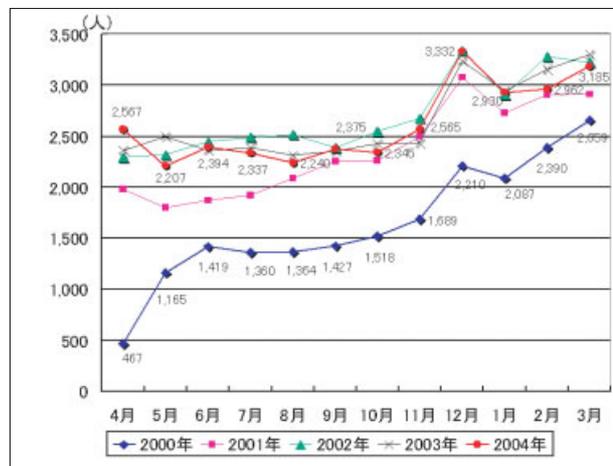


図 2-2-13 コミュニティバスの利用者数の推移
(出典：音更町資料)



2-2-4 環境衛生

本町の下水道処理区域は、2004年時点で988ha、普及率人口35,002人（13,971世帯）下水道普及率82.0%です。農村地域の一部では農業集落排水施設が導入されていますが、2000年から合併処理浄化槽による個別排水処理施設事業を進めています。

市街化区域の下水終末処理は、音更・木野污水ポンプ場を中継して、帯広市の十勝川浄化センターに運ばれ化学処理しています。センターで排出される汚泥は農地還元などで有効利用されています。また、十勝川温泉地区内の十勝川温泉浄化センターでは、微生物の働きで処理する活性汚泥方式により、一般の污水および化学処理を要する温泉水を除く温泉浴場の污水について浄化・処理しています。

ごみの処理について、本町は容器包装リサイクル法の施行に伴い、1998年から5種分別収集（可燃ごみ、不燃ごみ、有害危険ごみ、大型ごみ、資源ごみ）を行っています。

以降、再資源化の割合は向上しています。今後も分別品目の拡大などに対応した処理体制の構築や、減量化・資源化への積極的な取組みを進める必要があります。



図 2-2-14 音更町の公共下水道普及率の推移
(出典：音更町資料)

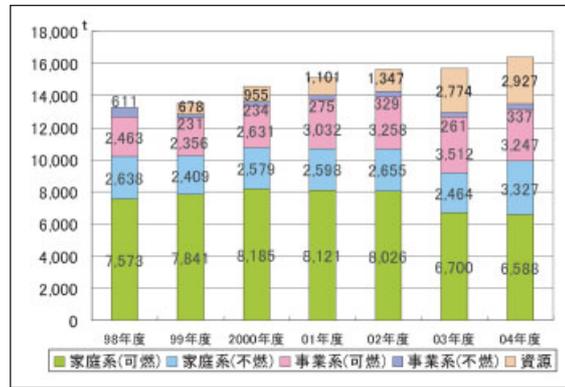


図 2-2-15 ごみ排出量の推移
(出典：音更町資料、資源ごみは99年から集計)

2-2-5 緑地・公園

町内の地形的特徴である「河岸段丘の樹林」と十勝川・音更川の「河畔林・緑地」は、都市計画マスタープランにおいて緑の形成方針における「緑の軸」と位置づけられています。また、町内の都市公園4箇所を「緑の核となる公園」として位置づけており、これらの緑の軸・緑の核を中心とした、緑の有機的連携による環境形成を目指しています。

緑の核となる公園のひとつ、2003年に開園した「北海道立十勝エコロジーパーク」は、十勝川温泉に近接し、自然に触れ合うことができるレクリエーション・環境体験学習の場として、多くの来園者で賑わっています。

表 2-2-4 公園の状況
(出典：音更町資料)

年次	各年4月1日現在 単位:(面積)ha															
	総数		住区基幹公園						都市基幹公園				都市緑地		その他	
			街区公園		近隣公園		地区公園		総合公園		運動公園					
公園数	面積	公園数	面積	公園数	面積	公園数	面積	公園数	面積	公園数	面積	公園数	面積	公園数	面積	
1999年	79	132.1	62	11.28	4	10.34	1	4.03	2	27.43	3	74.65	5	4.16	2	0.20
2000年	79	140.9	62	11.28	4	10.34	1	4.03	2	27.43	3	74.65	5	12.96	2	0.20
2001年	79	140.9	62	11.28	4	10.34	1	4.03	2	27.43	3	74.65	5	12.96	2	0.20
2002年	80	156.5	63	11.53	4	10.34	1	4.03	2	27.43	3	90.04	5	12.96	2	0.20
2003年	81	169.4	64	11.78	4	10.34	1	4.03	2	27.43	3	102.6	5	12.96	2	0.20

■ 2-3 歴史文化的背景

2-3-1 歴史

音更（おとふけ）の語源はアイヌ語の「オトプケ（毛髪生ずるの意）」に由来します。「アイヌ文化」は、文字を持たない伝承文化でした。食料を得る場所などを伝える意味で地名を残し、自然環境そのままを言葉に表現したとされています。アイヌ民族は縄文人→続縄文人→擦文人→現代アイヌ人という系譜を辿ってきたと考えられており、衣食住、信仰、行事、音楽などにおいて独特な文化を築いています。一般的に「砦」と解釈される「チャシ」跡は、音更町を含め十勝川流域に多く分布しています。

1869年（明治2年）、我が国は新政府のもとで統一、開拓使が置かれ蝦夷は北海道となりました。あわせて行政区画が定められ「十勝國河東郡」が公示決定されました。記録では、音更に初めて和人が定住したのは1880年とされています。以降、未開地の開拓が始まり、厳しい自然条件、冷害凶作、過酷な労働を克服し、十勝・音更町の農業の礎を築きました。

全国の家畜改良センターで最大の規模を誇る「独立行政法人家畜改良センター十勝牧場」は、1910年に内閣所管の「十勝種馬牧場」として創設されました。牧場の規模は当時、東洋一の広さといわれていました。現在、敷地の総面積は4,221haであり、1.3kmの延長を持つ白樺並木、大草原で牧草を食む牛、馬や羊などその雄大な牧歌的景観は、映画のロケにも使われるほどで、音更の原風景として町の観光資源のひとつにもなっています。



図 2-3-1 十勝牧場の景観

2-3-2 生涯学習・教育

本町では「第二次音更町生涯学習推進基本構想（2001年3月）」を策定し、音更町生涯学習推進本部を設置し取り組んでいます。今後、町民との有機的連携・協力体制を強め、「生涯学習によるまちづくり」を総合的に推進することがテーマです。

町内には、小学校15校、中学校5校、高校1校、私立短期大学1校があります。「第4期音更町総合計画」では、次代を担う子供たちや青少年を健全に育てるため、学校・地域・家庭との連携を深めた子供たちの育成を推進しています。また、学校施設における環境整備施策として、太陽熱利用など環境にやさしい設備を整えた「エコスクール」の整備を進めており、2004年には、下士幌小学校が太陽光発電を活用した「エコスクール」に生まれ変わりました。

また、本町の学校給食は、10年ほど前から「大地のめぐみ給食」として地場の産品を給食に取り入れ、子供たちから好評を得ているほか、地産地消や身土不二^{*1}に通じる取組みとして評価されています。

*1 「人と土は一体である、人の命と健康は食べ物で支えられ、食べ物は土が育てる。故に人の命と健康はその土と共にある」といった考え方のこと



■ 2-4 音更町の地域特性

本町の自然環境条件、社会環境条件及び歴史文化的背景などをもとに、新エネルギーの導入の観点から地域特性を以下にまとめます。

地域特性-1 四季の変化に富んだ大陸性気候 ～ 雪氷熱エネルギー

- 本町は、年間積雪量・降雪量とも格段多いとはいえません。しかし、初夏のころまで気温は低く冷涼であり、日較差も大きいという特性があります。このことから、夏場までの雪氷保存に適した場所であるといえ、雪氷熱エネルギーの導入可能性について検討します。

地域特性-2 道内で有数の多日照地域 ～ 太陽光発電・熱利用

- 十勝地方は、道内でも日照が多く得られる地域であり、中でも本町（特に南部）は多日照地域に属します。このことから、太陽光発電・熱利用に関して検討を進めます。

地域特性-3 風速は全道的に見てさほど強くない ～ 風力エネルギー

- 本町は、全道的にみてもさほど風は強くありません。しかし上空では、地上より強い風が吹いていることから、一般に風力発電に必要とされる最低平均風速といわれる6 m/s以上の風速の有無などを含め検討を進めます。

地域特性-4 農業大国十勝を支える大規模農業地帯 ～ 農業系バイオマス

- 本町は、日本の穀倉地帯である十勝地方でも屈指の大規模農業地帯であることから、豊富な農業系バイオマスエネルギーが賦存していると考えられます。一方で、農業の機械化が進んでおり、化石燃料に頼らざるを得ない経営構造となっていることから、未利用エネルギーの活用による資源循環型の農業などについて検討を進めます。

地域特性-5 森林の多くが民有林、人工林の割合が高い ～ 林業系バイオマス

- 本町の森林は、その85%が民有林であり大きな特徴となっています。民有林という機動性の優位を生かしつつ、人工林の施業と連携した利活用を検討します。また、本町の林業における経営基盤の強化に向けた取組みのあり方を含め、新エネルギー導入方策の検討を進めます。

地域特性-6 農業・食品加工業と関連も深い観光産業 ～ 温度差エネルギー

- 十勝川温泉地区を中心に展開される観光産業は、基幹である農業をはじめ食品加工業など関連する産業も多く、まちづくりの視点も含めた新エネルギー活用による総合的な振興方策を検討します。